
有給休暇

水原 唯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

有給休暇

【Nコード】

N5513Q

【作者名】

水原 唯

【あらすじ】

趣味の新薬の実験中にいきなり別階層の国に召喚された主人公。誰よ、人の許可もなく召喚なんぞしてくれて！！せつかくいい感じの配合比が導き出せるところだったのに！！って、叔母様！？有給休暇ってなんですか！？いりませんよ、そんなもの！！

プロローグ（前書き）

初投稿になります。一応、R15とさせていただきますが、当分はほのぼの進む予定です。よろしく願います。

ブローグ

—————どさっ。

「いつ、痛っ」

腰を強打したのだから痛くて当たり前だ。今日もいつものように実験室に籠って新薬の研究に勤しんでいたところだったはずだ。急に上に引っ張られる感覚がしたと思ったら、視界が反転して気づいたら落下していたのだ。

「おほほほ。いらっしやい。アリス。」

呆然とするアリスに壇上の椅子に満面の笑みを浮かべて座っている妙齡の美女が朗らかに話しかけた。

「リイル叔母様！？な、もしかして、ここは……」

「そうよ。1階層、空国よ。サリイがね、あなたが実験室にばかり籠っていると愚痴を言っていたから有給休暇に私の国に招待したの。」

「……叔母様、いくら身内とはいえ本人の了承も得ずに召喚するのは、犯罪です。」

その1

本日もいい天気らしい。実験室に籠りきりだから目視できないが・・。

直射日光に当たると変質する物質もあるから窓には暗幕が引かれている。室内は、光魔術具と風魔術具によって明るさを保ち、空気を換気している。

食事と寝る時以外は1日の大半をここで過ごしている。長時間かかる実験や画期的な配合を思いついた時などはそれさえも忘れがちになるが、そんなことをすれば侍女長のメリッサにお説教に合う。乳母でもあつた彼女のお説教だけは何としても避けたい。

「私の育て方が・・・！！サーラ様、申し訳ありません。」と泣き落としに合う。

彼女は、幼い頃に母を亡くした私の実質的な母の一人だ。どうしても勝てない。

「ふゝむ、後は、赤紅草と黒岩苔を混ぜて見るか・・・。対比は1：1から始めて、1：0・1までの経過をみよう」

かちゃかちゃ。ごりごり。かちゃかちゃ。ごりごり。

紫色に変色してきた。ん、やっぱり1：1だと黒岩苔が多いか。
混ざり具合を見て、次の割合を思案していたところにベルが鳴った。

その2

「お久しぶりです。お姉さま。」

ベルが鳴ったので、実験を中断して、通信機をとれば来客の知らせだった。

主をベルで呼び出すなど礼儀に反していると口うるさい者には云われるだろうが、基本的に実験室への人の出入りを制限している為、用がある場合はベルで呼び出すように義務付けている。

実験室に頻繁に出入りなどされては、風で粉が舞ったりして思わぬ事故に成りかねない。それでも新しい調合を試す際には、小規模の爆発など日常茶飯事だ。新しいものを作るためには多少の冒険も必要なものだ。

「久しぶり、サリィ。元気そうね。今日は、どうしたの？」

ひと月ぶりに会う妹は、相変わらず可愛い。結婚前は、その可愛らしさに心を奪われた求婚者が列を作ったのも頷ける。うん。私の妹は可愛い。

「用事がなければ、会いに来てはいけませんの？ 仕事が忙しいとお茶会や夜会には出てきてくだいませんし、研究も自宅のほうがはかどると新薬が完成した時や決算のときにしか登城もなかなかしてくれないと皆も嘆いていましたよ。」

サリイは可愛らしい顔を顰めながら、ため息をついた。

「やっと新薬の開発に時間が思う存分とれるんだ。それでなくても煩わしい所には、行きたくない。」

どうしても必要な時以外は、極力城には行きたくない。頻繁に登城しても面倒な人種に絡まれて疲れるだけだ。

新薬ができた時は登録が必要だから行く。決算の時も会議には出ないと予算が出ないから仕方なく出席しているのだ。

「仕事ばかりしていないで、たまには、外に出て下さい。今度の城で行う夜会には絶対来て下さいね。」

「たまには外にも出ているわ。」

一応、反論してみる。基本的に実験室に籠っているが出ないわけではない。

にっこり。

「仕事で使う薬草を買い付けに行くために、ですよ。」

サリイが笑みを浮かべながら言った。・・・怖い。

「サ、サリイ。」

「3日後の夜会でお会いするのを楽しみにしております。お姉さま。・・・もしまた、仕事だと、いらっしやらなかったら・・・。」

サリイは、さらに笑みを深めて穏やかに話す。

「わ、わかったわ。今回は出席するから。」

- - - - - 4日後の朝 - - - - -

んゝ昨日はいい感じに混ざり合ったわ。手ごたえがあったものだから、つい、徹夜で調合を行ってしまったけど、もう少しで出来上がりそうね。でも、徹夜してしまったからまた、メリツサにまたお説教されるわね。はあ。一応、主人なんだけどなあ。そういえば、何か忘れてる気がするけど、なんだったかしら。

・・・この時に思い出してフォローしておけば良かったと今更思っても後の祭りである。

その3

「よし！あとはこれを精製すれば完成！！黒苔岩とのちょうどよい配合比を出すのに苦労したけど、うまく行きそだね。」

アリスは、3か月かけて実験を繰り返した新薬の完成の目処がつき、思わず顔がにやけてくる。

んゝ、ろ過に時間がかかるし、その間にお風呂に入って一休みしようかしら。実験室にこもりつきりだったから全身よれよれだわ。

侍女にお風呂に入ることを伝えるために、ベルを取った。

「えっ」

床が光り、召喚陣が浮かび上がる。
そのまま光は、アリスの全身を覆った。

- - - - -
かつん - - - - -

ベルが外れ、テーブルにあたる音だけが響く。

その4

いい天気だなあ。アリスは、中庭でお茶を飲みながら空を眺めた。

「はあ。何でこんなところに。」

実験室から召喚陣で呼ばれた場所は、一階層主国の空国だった。私
がいた場所は三階層にある漣国。階層毎に空間が異なる為、普通な
らば両国の間に国交はほぼないはずだった。・・・普通ならば。
ではなぜ私がここにいいのか。それは、目の前の御方に聞いていた
だきたい。

「ため息などついて、どうかしたの？アリス。」

召喚した犯人が、穏やかに問いかける。

「いえ、何でもありません。リイル叔母様。」

「でしたら、こんなにいい天気なのだから暗い顔をしてはだめ。せ
つかく美人に産んであげたのにもったいないわ。」

あなたに、産んでもらった記憶はございません。叔母様。

床が光ったと思ったら急に上に引っ張られる感覚がし、視界が反転
して気づいたら落下していたのだ。腰を強打し呆然としている所に、
満面の笑みを浮かべたリイル叔母様に朗らかに話しかけられた。

サリイがね、あなたが実験室にばかり籠っていると愚痴を言っていたから有給休暇に私の国に招待したの。

てっ！！叔母様、いくら身内とはいえ本人の了承も得ずに召喚するのは、犯罪です。有給休暇とか勝手に申請しないで下さい。

いくら気乗りしないからといって、サリイとの約束を忘れていたのは全面的に私が悪かった。けど、何もリイル叔母様と結託して別階層に強制的に召喚して休ませることないと思います。誰に似たのか、普段は、温和なのに怒るとホント怖い。

「アリス、聞いているの？アリス！」

「ええ、なんですか、リイル叔母様。」

召喚された時のことを思い出していて、さっぱり聞いていなかった。

「レオのことよ。どお？私の息子だけあつてかつこいいでしょ。アリスがレオのお嫁さんに来てくれるなんて素敵だわ。」

「ちょ、リイル叔母様！私の妃候補は、召喚陣を使う為の名前だけのはずでしょ？他に9人もいるんだからそっちから若いお嫁さんもらってください。」

その5

いくら王妃であるリイル叔母様といえど異空間にある三階層から一階層に簡単に人を召喚することはできない。正式な召喚を行うには、召喚をする側とされる側の両国王の承認が必要になる。両方の承認が得られて異空間を繋ぐ扉が開かれる。なので、普通は有給休暇をとらせる為に召喚するなど許可されることはない。

今回、召喚が許されたのには理由がある。

空国第一王子の王妃を決める為に候補者を集めることになったのだ。空国は、一階層の主国。主国とは、その階層毎に行われる世界議会の主催国。私のいた三階層は3年毎に主だった国により主催国が順番に変わるが、一階層は違う。一階層の主国は、空国と決められていた。

つまり、他に対抗馬のいないほどの大国。その空国第一王子の王妃には空国内や一階層の国々はもちろん、異なる階層の国からも縁談がいくつも舞い込むのは当然だろう。けれど第一王子は女嫌いらしく、縁談をすべて断ってしまうらしい。無理に縁談を推し進めようとした者の不正の証拠を掴んで左遷させたと聞いた。

叔母様はそれに便乗する形で、私を3階層の候補者として召喚したのだ。もちろん空国王と蓮国王の承認を得て。

ちなみに、第一王子は現在28歳。叔母の実子ではない。王子を産んだ後すぐに、先の王妃が亡くなりその数年後に空国王に見染められて後妻として嫁いだのだ。王子とはそこそ良好な仲らしく、叔母が産んだ双子の第二王子と第一王女を弟妹として可愛がっているらしい。

今回の王妃候補は、王妃の条件として魔力が高いことがあげられた。

第一王子の魔力がずば抜けて高いらしく、魔力が釣り合わない者同士が子供を授かることが難しいからだ。その為、縁談があつた国々から厳選されて、国内から3名。2階層から2名。3階層から私ともう一人。4階層から2名。5階層から1名。合計10名が選ばれ空国に呼ばれた。迷惑な話だが、私も魔力が高いので問題なく候補入りしたという。

「若いお嫁さんと言っても、好みもあるでしょ？アリスだってレオナルドより4つも若いから、大丈夫よ。」

リイル叔母様が不服そうに言うが、冗談じゃない。

「確かに殿下よりは若いですが、王家に嫁ぐにしては、行き遅れです。それに空国に呼ばれた日に候補者の顔合わせ以来姿を見かけておりませんので勧められても困ります。」

その6

——
だんっ。

「何をしている！次の者、前へ！」

「は、はいっ！！」

——
がっ！！どさっ！！

「近衛騎士団員が、これくらい受け身を取れなくてどうする！！次！！」

王によって決められた妃候補の姫君が召喚されてからストレスが溜まり続けたレオナルドは、ついにキレ、先程から騎士を相手に剣の稽古をしてストレスを発散していた。

「うわぁ。殿下の機嫌は、相変わらず最悪のようだな。」

先程から剣の稽古と言ってレオナルド王子が近衛騎士相手に剣を奮っている姿を遠くで眺めながらランディは隣に立っているジルに囁いた。ランディは、近衛第一騎士団副隊長でレオナルド王子の側近だ。

「ええっ。稽古とは名ばかりの新人にとっては、拷問に近いですよ。妃候補を問答無用で陛下に決められてからずっとあの調子です。というより悪化してますね。連日、妃候補の姫君方からの様々なお誘いが来ますから。しかもそのお誘いを片っ端から断ってるのに懲り

ずに手紙が大量に届きますからね。最近では偶然を装った待ち伏せをされたりしてもう最悪ですよ。」

ランディの囁きに、同じくレオナルド王子の側近で政務補佐を務める、ジルライトが答えた。

「うへっ。只でさえ殿下、その手の女、嫌いなのにそれはキレるわ。」

「可哀想に殿下の相手をしていた近衛の連中ボロボロですよ。妃候補の姫君のお誘いにストレスが溜まるのは分かりますが手加減してくださいよ。それに、妃候補の姫さま方は美人揃いなんでしょう？ 誰がお好みの方はいらっしやらないんですか？」

ランディが笑いながら言う。

「はっ、煩わしいだけだ。」

レオナルドは、書類に目を通しながら答える。

それにしても、わざわざ各階層から召喚など陛下も余計なことを。王位を継ぐまでに結婚しなければならぬのは分かっているが、ドレスと宝石と噂話しか興味がない女など側におきたくないから今まで逃げていたのだ。本当に面倒なことだ。

その7

いい感じのところね。

空国の王宮には、大きな庭園が2つある。

2つある庭園のうち一般的によく知っているのが、王宮正面に位置する南の庭園。

この庭は、来客の目に止まる場所の為、季節の草花が主に植えられており、庭師たちにより美しく華やかに造られている。

もうひとつは、西の庭園。こちらは、王族専用。

現在は、王妃であるリイル叔母様の好きな花が色とりどり植えられており、基本的に王族の招待がないと入れない場所となっている。

ちなみに、先日アリスがリイル叔母様に呼ばれてお茶を飲んでいた場所である。

今アリスがいるのは、その西の庭園の奥、王宮の裏側。

そこは西の庭園とは違い、人の手がほとんど加えられていないままの状態で自然に草木が生い茂っている。この場所は、主に若い王族達の遊び場として使われていて王族専用の庭からしか出入りできない為、この森も西の庭園の一部として一般には認知されている。

せっかくなので一人でゆっくりできる場所にはないかとリイル叔母様に聞いたところ、叔母様の子どもの王子たちは、全寮制の学院に通っている為、誰も出入りしないところを勧められた。趣味の仕事をとり上げられ、妃候補の姫君たちのお茶会にもレオナルド王子にも興味がないで暇なのだ。

「風が気持ちいいわ。滞在している間はここに生えている薬草を研究して過ごすことにしようかしら。」

「……仕事のしすぎで、妹に怒られ召喚されたのに一切懲りていない。」

「そこで何をしている!」

草木を眺めながら、のんびりお茶を飲んでいたアリスに鋭い声がかけられた。

その8

ゆったりと微睡んでいたところに声をかけられ振り返って見た顔は、今お知りたいたいになりたくない人ランキング絶賛1位のお方だった。

げっ！！第一王子！！

うわあ。リイル叔母様、絶対確信犯だね。そんなに妃候補の小娘達が気に食わないのか！！

私は、王妃なんか絶対に嫌だし、休暇だというから静かな場所ですっきりしたいと言ったのに。てか、この場所には、最近は何も出入りしていないって言ったじゃない！！第一王子が来ないかも確認したじゃない！！リイル叔母様の嘘つき！！

「ここは王族の許可がなければ出入りできない場所、誰の許可を得てここにいる！答えよ！！」

「王妃さまより許可を頂きここにおりました。殿下がお立ち寄りの場所とは知らず失礼いたしました。すぐに立ち去りますのでご容赦下さい。」

さっと立ち上がり、深く頭を下げる。

「義母上から許可が出ているだと？西の庭園ならば客人も招くことは稀にあるが、ここは身内しか立ち入らせないはず。そなた何者だ？」

ちっ！！すぐ出てくって言ってんだがら細かいこと気にするなよ。
名乗らずさつと逃げる予定だったのに。

「名乗りもせず失礼しました。申し遅れました、私、三階層蓮王姉、アリスティア・ユーリ・リーフォントと申します。王妃さまの姪にございます。静かで誰もいない場所でゆっくりしたいと我儘を申したところ、こちらを紹介されました。殿下がお立ち寄りの場所と露知らず大変失礼いたしました。重ねてお詫び申し上げます。」

「姪？ああ、義母上は三階層出身の方だったな。蓮国の姫君とは知らずこちらでも失礼した。義母上が許可を出したというならばそのまゝいていただいて結構です。」

「いえ、私はそろそろ部屋に戻ります。御前失礼いたします。」

誰がこれ以上ここにいるか！！各国の姫さま方がいくらかお誘いしても答えてくれないと嘆いているのに、一緒にいたことがバレたら面倒な事になるわ！！

「殿下が許可したにもかかわず行ってしまわれましたね。」

あの方が蓮国の姫君ですか。そういえば、あの方からだけはお誘いを受けませんでしたね。お付きの侍女も連れてきていらっしやらないとの事です。」

「・・・そうか。」

その9

「レオナルド。話があるからこの後私の部屋に来なさい。」

朝の会議の後、陛下の執務室に呼び出された。

どうせ妃候補として集めた姫達との進展を聞く為に違いないが、人前で陛下に呼び出されては、無視するわけにはいかない。

「レオナルドです。失礼致します。」

「ああ。急に呼び出してすまん。最近、東の森の魔物の動きが活発化していると報告があったが、実際どの程度のものなのだ？」

「報告書に記載した通り前年度の2倍近くの魔物が目撃されており、王都近くでの目撃情報もありました。今のところは、派遣している討伐部隊で対応できているようですが、増援が必要となるかもしれません。」

「・・・そうか。しばらくは注意深く様子を見るように。で？どうだ？気になる姫はいたか？レオナルド。」

「・・・やはりその件か。」

「魔物の件につきましては、騎士団に通知しておきます。」

「姫達はどうだ？招待をすべて断っているそうじゃないか。」

「・・・」

「はあ。情けない。よし！明日より順番に姫君たちと会うように。どこで会い、何をするかは姫達の希望を聞いておくからその通りにするように――！」

「なっ！！そんな暇はありません！！！」

「時間は作るものだ。これは国王命令だから――！拒否は許さん！！！」

「・・・っ、かしこまりました。」

その10

第一王子の執務室には、息苦しくなるような重い空気が漂っていた。暗雲の発生源は誰に問わなくとも一目瞭然である。部屋の主のレオナルドだった。

「まあまあ。落ち着いて下さい、殿下。あと2人で終わりじゃないですか。」

「黙れ。」

ランディが和ませるように声をかけたが一刀両断された。

陛下の命令から5日。レオナルドは、仕事をどうにか調整して姫君たちとの交流をしてきたがそろそろ忍耐も限界を突破しようとしていた。

姫達の希望通り1人ずつ時間を作って会っているのだが、皆、レオナルドが苦手とする姫達ばかりであったのだ。・・・基本的に深窓の御姫様・女性らしい典型的な貴族の令嬢が嫌いであるから仕方がないといえば仕方がないのかもしれない・・・。

~~~~~レオナルドのこれまでの4日間~~~~~

1日目 空国公爵家令嬢とお茶会・・・王子に憧れていましたと熱弁される。

第五階層の姫との夕食・・・ご趣味は？何が好きですか？とひたすら質問責めに遭う。

2日目 第二階層黒国の姫との庭園散策・・・西の庭園にも自由

に出入りしたいと強請られる。

第三階層柊国の姫とのお茶会・・・人見知りの為、王子の顔をまともに見れず。

3日目 空国公爵家令嬢との遠乗り・・・一人で馬に乗れないと相乗りを希望される。令嬢はドレス着用。

第二階層青国の姫との夕食・・・ご趣味は？何がお好きですか？とひたすら質問責めに遭う。1日目とほぼ同じ質問。

4日目 空国侯爵令嬢とのお茶会・・・公爵令嬢達から嫌がらせをされていると訴えられる。

第四階層霧国の姫との夕食・・・王子に憧れていましたと熱弁され、いかに自分が王妃に相応しいか語られる。

・・・さすがに可哀想かもしれない。がんばれ、レオナルド！

「今日の予定はどうなっている？」

レオナルドは、苛立つ心を抑えながらジルに問いかける。

「昼から第三階層蓮国の姫と遠乗り、夕食は第四階層風国の姫と会食です。これで一巡しますので、本日だけ我慢なさって下さい。」

「わかっている。昼から第三階層蓮国の姫と遠乗りだな。ちつ、馬にもろくに乗れぬくせに遠乗りに行きたいなどよく言えるものだ。」

吐き捨てるように呟き馬舎へと向かった。

## その11（前書き）

お気に入り登録ありがとうございます。これからやつとレオナルドとアリスの二人で話が進む予定です。ので引き続きよろしく願います。

## その11

やっぱり行かなくちゃダメよねえ。

アリスは、時計を見上げて思わずため息をついた。

レオナルド王子との遠乗りの約束の時間が迫っていたのだ。

国王の提案により妃候補とレオナルド王子との交流がはじまったのだが、元々、王太子妃になどなる気がないアリスにとっては迷惑でしかない。

一応抵抗してみたのだが、リイル叔母様に一喝されてしまった。王子と何をしたいかと希望を聞かれたのだが、関わりたくないというのが本音であつた。

お茶会や食事は二人で何を話せばいいか分からないので沈黙が続くことが予想された。伶俐な顔立ちのレオナルドと二人で無言の食事など絶対にごめんだ。だったらまだ会話なくていい遠乗りのほうがマシだと判断し希望をだした。

王子と一緒にというのは嫌だけど、護衛もいるだろうし。なにより外に出れるしね。

研究もできないのに部屋に籠りきりで退屈をしていた。

城をうつついて他の候補者と遭遇しても面倒なので基本的に部屋でおとなしく本を読んだりして過ごしていたのだ。北の庭にはあれ以来行っていない。

よし。行きますか。

「そろそろ約束の時間なので、着替えます。」

「お手伝い致します。姫様。」

---

「本日は、お忙しい中我儘を聞いていただきありがとうございます。ありがとうございました。」

乗馬服に身を包んだアリスが、レオナルドに向かって一礼する。

「・・・陛下からのご命令だ。あなたが気にすることではない。」

「お気づかいいただき、ありがとうございます。私はどの子にやらせていただけるのでしょうか？」

アリスは、嫌みに気づかぬふりをしながら微笑み、レオナルド王子に問いかける。

## その12

なぜかしばしの沈黙が続き、レオナルド王子に好きな馬を選んでいと言われたので、馬舎を覗いてみると奥にいた漆黒の毛並みが美しい馬と目が合った。

見つめているとアリスの視線に気づいたように前に出てきて鼻先をアリスに寄せてきた。

「あつ！！姫様。そいつは・・・！！」

馬番の男が手を伸ばして触ろうとしたアリスに慌てて静止の声をかけるが途中で途切れてしまう。

「綺麗な子。この子がいいです。」

黒毛の馬を撫でながらそういうアリスを驚愕の目で見つめる。

「ん？この子はダメなの？どなたかの専属の馬なのかしら？」

「い、いえ！専属ではありません。ですが、気性が荒い為、あまりお勧めは致しません。」

「そうなの？とても良い子よ。専属でないならば気に入ったからこの子にするわ。」

馬番が王子に伺いの視線を向ける。

「・・・問題ないようだ。そいつでいいだろう。」

「かしこまりました。ご準備致します。」

颯爽と白馬と黒馬の2頭が駆けていく。その後ろを数頭の馬が付かず離れずの距離を保ちながら追いかけていく。

「やっぱり。外は気持ちいいわね。黒耀、もう少し早く駆けるわよ。」

アリスは、巧みに馬を駆けさせながら久しぶりの遠乗りを満喫していた。

アリスが選んだ馬は黒耀という名で、軍馬の名産地アルザスから国王に献上された最高級の軍馬だった。

すでに王には専属の愛馬がいたため騎士団に下賜されたのだが、誰にも乗りこなせなかったのだ。名馬を多く輩出しているアルザス産の馬は生来気性の激しく主人と決めたものにしか懐かない。いくら名馬といえど乗り手がいなくては意味がない。血統は最高なので繁殖用にしたほうがよいのではとの声も上がっていたほどだ。それがアリスには自ら寄って行き触らせたのだから、馬番が驚いたのだった。

しばらく思いのままに黒耀を走らせたところで木陰が見えた。ちらりと隣を走るレオナルドに視線を向けると声をかけられる。

「あの木陰で休憩をとりましょう。」

「かしこまりました。」



### その13（前書き）

本日、2度目の更新です。何話が微妙な修正をしましたが、話の内容は変わっていません。

## その13

「いやあ、姫様は乗馬がお得意なのですね。あの黒耀を懐かせた事といい、見事な腕前でした。」

「そうかしら？ありがとうございます。」

木陰に到着し黒耀から降り、撫でているアリスに護衛としてついてきたランディが声をかける。  
その間に他の騎士達が敷物が広げて休憩の準備を整える。

「殿下、準備ができました。」

アリスを見ていたレオナルドに騎士が声をかける。

「ああ。ご苦労。 姫、このようなところで申し訳ないが、こちらにお座り下さい。」

「お茶の準備までしてきて下さったのですね。ありがとうございます。」

レオナルドに勧められて向かい側に腰を下ろしたアリスにお茶が渡される。ピクニックにでも来たような軽食とお菓子がそこには広げられていた。

「・・・料理長が準備していたので持ってきただけです。」

「そうですか。では、あとでお礼を伝えてもらわなくては。こちらの料理人の方は、本当に腕がよい方ですね。美味しい食事に感謝しておりますわ。」

「・・・そうですか。」

「ええ。」

「・・・ほらっ！！やっぱり王子と二人で食事なんてこうなるじゃない！！何話せばいいのよ！仕事の話はダメだし、沈黙が気まずいわ。」

「そういえば、殿下。フィルライト様とレティシア様は、ご健勝でしうか？3年前にお会いしたきり手紙でしかやり取りがなく今回、空国に参りましたのでお会いできると楽しみにしていたのですが、学院に入られたとの事で王宮にいらっしやらずに残念に思っております。」

「っ！？ 弟達と親交があったのですか？」

「ええ。王妃様とは通信鏡を通して折々に連絡をとっていたものですから、フィルライト様とレティシア様とも親しくさせていたたいております。3年前に王妃様が里帰りされた時に一緒に蓮国にいらっしやいましたきり機会がなくお会いできておりませんが。」

「そうでした。3年前の義母上の帰郷の際に共に蓮国に行ったと報告をうけていましたが、その頃は仕事で城を離れていたものですか。すぐに思い出せず申し訳ない。二人とも元気です。学院に入ってから私は私も頻繁には会っていませんが、長期休みで城に帰ってきた時に学院での様子を楽しそうに話していました。・・・時々、問題を起こしているようですが。」

「ふふふ、そうですか。私に届く手紙にも学院での様子が楽しそうに書かれていましたが、お元気そうで何よりです。ふふふっ。」

それからフィルライトとレティシアの話を中心に話が弾んでゆく。  
珍しくレオナルドが無表情ながら楽しそうな雰囲気醸し出している。

「ああつ。すっかり話しこんでしまいましたわ。日が暮れてしまう前にそろそろ城へ戻りませんか？」

「・・・そうだな。そろそろ戻ろう。」

レオナルドは客人である姫様には丁寧な言葉遣いをしていたが、アリスがお気づかいなくと言ったので一応客人用にはしているが、だいぶ素に近い話し方になっていた。

「殿下。今日は、大変楽しい時間をありがとうございました。またの機会を楽しみにしております。」

城に戻り馬舎に黒耀を返してからレオナルドに微笑みながら感謝の意を伝える。

最初は、予想通り沈黙が続きどうしようと思ったが話してみると意外と楽しかったのだ。伶俐な美貌でほとんど無表情に近いがなんとなく楽しいのか、困っているのか表情が出ているのに気づいたのだ。  
・・怒っているときは眉間に皺がより温度が下がるのですぐ分かる。

女嫌いとか聞いたけど、これならすぐにいいお嫁さん見つかるわね。よかったね、リイル叔母様。

いくらレオナルドの印象が当初より良くなっても、アリスは自分が妃になる気は皆無だった。レオナルド本人は関係なく、王太子妃ひいては王妃になるのが嫌なのだ。

「・・・ああ。今度また。」

アリスの心の呟きを知らずに、次回の約束をしてレオナルドが執務室へと帰っていく。

## その14

・・・なんで私ここにいるんだろう。・・・ダメだ！！最近この手のセリフが多すぎる！！

アリスは、思わず自分の心の声に自分で突っ込みを入れてしまう。

「なにをしている、アリスティア。出発するぞ。」

「はい。申し訳ありません、殿下。只今参ります。」

ぶつちやけ現実逃避中であつた。

レオナルドと初めて出かけてから数日後に今度はレオナルドから遠乗りの誘いがあつたのだ。そのことをアンから聞かされた時は思考が停止した。

アンは、今回リイル叔母様の人選でアリス付きの侍女となつた5人うちの1人で侍女のまとめ役をしている。

ちなみに正式な異界を繋ぐ扉を使えば一度に数十名が界を渡ることができる為、アリス以外の姫君たちはお付きの侍女を何人も連れてきている。

誘拐のごとく召喚陣で連れてこられたアリスにはもちろん侍女はいない。召喚陣での異渡りは基本的に生き物以外を主に運ぶ為のもので人は一人魔力の性質上が限界なのだ。

レオナルドとの外出は思いのほか楽しいものだったのだが、妃にな

るつもりなどさらさらないアリスは別れ際にまた行きたいと言いつつ何の誘いもしなかったのである。

女嫌いで通っているぐらいだからこちらから誘わない限り接点などないに等しい。

他の姫たちがガンガン誘いをかけているのは噂で聞いていたので早く誰かに決まって帰りたいなあと思っていた。

普通、王族や貴族の娘は20歳までには結婚するものなのでアリスは完全に嫁き遅れ。叔母にも言ったがわざわざ自分などを選ぶはずもなく、若くて可愛い姫を選ぶだろうと高をくくっていた。

が！！それなのになぜかレオナルド王子から遠乗りの誘いが来てしまったのだ！！

他の姫からの誘いは断ったというではないか！！なぜだ！？

仮にも妃候補として城に滞在しているので王子からの誘いを断れるはずもなく、本日2度目の一緒のお出かけとなった。

アリスは、黒耀に顔を埋めながらなぜこうなったのかと呻いていた。

## その14（後書き）

次回はレオナルド視点の予定です。

## レオナルド視点〜遠乗りその1〜（前書き）

前回から更新が少し空いてしまいました。予告通りレオナルド視点です。長くなったので分けました。その2もほぼ出来ているので近々投稿します。お気に入り登録・総合評価ポイントすぐ増えていてびっくりしました。ありがとうございます。引き続きよろしくお願いします。

## レオナルド視点へ遠乗りその1

約束の時間になり、馬舎を訪れたレオナルドを蓮国の姫が乗馬服で待っていた。

ダール公爵家令嬢と同じようにドレス姿で来ると思っていたから驚いた。・・・顔は無表情を保ったままだったが。

「本日は、お忙しい中我儘を聞いていただきありがとうございます。ごさいます。」

乗馬服に身を包んだ姫が、レオナルドに向かって一礼した。

「陛下からのご命令だ。あなたが気にすることではない。」

媚び入るわけでもなく礼儀を弁えてお礼を言う姿に、どうやらダール公爵令嬢より数段まともらしいなと評価を下した。

しかも馬には一人で乗る気らしい。

空国では、乗馬ができる女性は少ないが、三階層では違ったのかも知れない。いや、義母上は乗れなかったはずと三階層の事について考えていたら返事をするのが遅くなってしまった。

蓮国の姫が何うようにこちらを見ていた。

どの馬に乗っていいかと聞いてきていたので乗れるならば好きな馬を選んでいいと伝え、馬舎担当のロイに手配を任せた。

・・・馬に乗れると言うのは本当のようだな。

楽しみに馬達を見る蓮国の姫の様子を見て、前回よりは楽な遠乗りになりそうだと喜びつつ、自分の愛馬に装備がつけていると馬舎担当

長のロイの慌てた声が聞こえてきた。

視線を向けると黒毛の馬を撫でる蓮国の姫を驚愕の目で見つめていた。

「この子はダメなの？どなたかの専属の馬なのかしら？」

「い、いえ！専属ではありません。ですが、気性が荒い為、あまりお勧めは致しません。」

「そうなの？とても良い子よ。専属でないならば気に入ったからこの子にするわ。」

ロイが視線で黒耀に乗せてもいいか問いかけてきた。

「・・・問題ないようだ。そいつでいいだろう。」

黒耀の様子を見ると主人に対するように従順と姫に寄り添っていたので許可を出す。

・・・あの気位が高く気性の荒い黒耀が懐くとは蓮国の姫は見た目通りの深窓の令嬢というわけではないようだ。脚色されていると思っていた昔聞いた噂のほうが真実に近いのかもしれない。

---

颯爽と馬を操る蓮国の姫の横を並走する。

ロイが心配そうに見送りをしていたが、姫は黒耀を見事に乗りこなしている。

まさか自分のペースと同じくらいで駆けるとは思わなかったが、久

しぶりに思いっきり駆けることができここ最近のイラつきが治ま  
ていく。

しばらく馬を走らせたところで木陰が見えた。姫がちらりと視線を  
こちらに寄こした。意図に気づき休憩の声をかける。

「いやあ、姫様は乗馬がお得意なのですね。あの黒耀を懐かせた事  
といい、見事な腕前でした。」

護衛としてついてきたランディが姫に声をかける。

あれは本気で称賛しているな。確かに大した腕前だった。騎士団で  
も上位の腕前だろう。

姫をなんとなく見ていたレオナルドに騎士が声をかけてきた。

「ああ。ご苦労。姫、このようなところで申し訳ないが、こちら  
にお座り下さい。」

これまでの行動で予想していたが、地面に直接ひいた敷物の上に抵  
抗なく座り礼を言われた。

姫はおしゃべりが得意ではないようで特に何も話さない。王太子妃  
になりたいと媚びを売られたり、くだらない話をされるよりは何も  
話さないほうがマシだが。

自分から姫に話かける気もないので、ただお茶を飲むだけの沈黙の  
時間の続いた。

「そういえば、殿下。フィルライト様とレティシア様は、ご健勝で

しょうか？3年前にお会いしたきり手紙でしかやり取りがなく今回、空国に参りましたのでお会いできると楽しみにしていたのですが、学院に入られたとの事で王宮にいらっしゃらなく残念に思っております。」

「っ！？ 弟達と親交があつたのですか？」

沈黙が続いたので、お茶を飲み終えた辺りで切り上げて早く帰れるかなどと失礼なことを考えていたところに姫から思いがけないことを言われて驚いた。

## レオナルド視点／遠乗りその2

「ええ。王妃様とは通信鏡を通して折々に連絡をとっていたものですから、フィルライト様とレティシア様とも親しくさせていただいております。3年前に王妃様が里帰りされた時に一緒に蓮国にいらっしゃいましたきり機会がなくお会いできておりませんが。」

何年かに1度、義母上のが三階層に里帰りする。前回の里帰りの時に共に蓮国に行ったと報告をうけていた。3年前は西の地で大規模な魔物の襲撃があり、長期で城を空けていた時だ。城にいたのなら一緒に行けたのにとずいぶん妹に責められたのを思い出した。

「そうでした。3年前の義母上の帰郷の際に共に蓮国に行ったと報告をうけていましたが、その頃は仕事で城を離れていたものですか。すぐに思い出せず申し訳ない。二人とも元気です。学院に入ってから私は私も頻繁には会っていませんが、長期休みで城に帰ってきた時に学院での様子を楽しそうに話していました。・・・時々、問題を起こしているようですが。」

姫に返答しながら、弟妹達の起こした騒動でここ数年で頭が薄くなった気がする副校長の姿を思い出した。

「ふふふ、そうですか。私に届く手紙にも学院での様子が楽しそうに書かれていましたが、お元気そうで何よりです。ふふふつ。」

姫にも想像できたらしく楽しそうに笑う。先程までの完璧な姫君の微笑みではなくいきいきとした表情に目を奪われる。

それからフィルライトとレティシアの話を中心に話が弾んでゆく。

本当に二人と親しいらしくレティから手紙で学園で起こした騒動についてほとんど知っていた。それからお互いの国の話や趣味という仕事の話も少し聞いた。

話の中でフィルとレティにはアリスと呼ばれていると聞いて自分だけ姫と呼ぶのがなぜか癪に障り、アリスと呼んでいいかと許可を求めた。戸惑いながらも許可を出しながら敬語も必要ありませんとアリスが言うので素に近いまま話し込んでいた。

「ああつ。すっかり話しこんでしまいましたわ。日が暮れてしまう前にそろそろ城へ戻りませんか？」

「・・・そうだな。そろそろ戻ろう。」

早く帰れるなど思っていたはずなのに、いつの間にかこんな時間になっていた。アリスからも話題を提供されたが、深く追求したのは概ねレオナルドのほうだった。

「殿下。本日は、大変楽しい時間をありがとうございました。またの機会を楽しみにしております。」

城に戻り馬舎に黒耀を返してからアリスがレオナルドに微笑みながら感謝の意を伝える。

「・・・ああ。今度また。」

思いのほか楽しい時間だった。他の姫たちには社交辞令としても次の約束などしなかったが、アリスとは次回の約束をして執務室へ

と歩みを進めた。

「今日は楽しそうでしたね、で・ん・か。」

ランディが珍しく女性と楽しげに過ごしたレオナルドをからかう。

「そうだな。」

激怒すると思ったレオナルドは、不敵に微笑みながらランディの言葉を肯定したのであった。

## その15（前書き）

大変お待たせしました。更新再開します。今後もしっかりお願いします。

## その15

「アリスお姉さまー！！」

いつものように王宮裏の庭で寛いでいたアリスに、突然、満面の笑みを浮かべながら美少女が突進してきた。

「ぐっ……。れ、レティ。」

「お久しぶりです！お姉さまー！！ずっとお会いしたかったです！！お姉さまが、空国にいらっしやっていると聞きして飛んでまいりましたわー！！」

アリスを力強く抱きしめたまま美少女は、思いの丈を熱く語り始めた。

「ひ、久しぶりね、レティ。私も会えてうれしいわ。できればもう少し力を緩めてくれると助かるのだけ……。っ！！」

アリスは、やんわりと抱きしめている力を緩めてくれるように頼んでいる途中に浮遊感に襲われて息をのむ。

黒い服の男に背後から抱きあげられ、圧死しそうなほど強く抱きしめられていた腕から助けられた。

「ああー！！ずるいわ、お兄様ー！！せっかくアリスお姉さまと再会を喜びあっていたのに邪魔をするなんてー！！」

「大丈夫か？」

黒い服の男、レオナルドは、激しく抗議するレティシアを無視して突然抱きあげられて混乱しているアリスに声をかける。

「え．．．ええ！！大丈夫です！ありがとうございます、殿下。」

「そうか。」

慌てて返事をするアリスを見てレオナルドは表情を緩める。

「無視するなんてひどいわ、お兄様！！アリスお姉さまを早く返して！！」

「返す？これはお前のものじゃない。」

「えっ？」

「まあ！！独り占めはズルいですわ。久しぶりにお会いする時から私が独占してもよいでしょう！！」

「だめだ。」

「はっ？」

「そんなに心が狭いとアリスお姉さまに呆れますわよ。」

「．．．だめだ。」

「．．．．．」

「．．．．．」

「あの〜」

無言の睨み合いをする兄妹に声をかける。

「なんだ？」

「はい、お姉さま。」

同時に返答があり、いまいち状況を把握できずに戸惑いながらもアリスは、正当な要求を口にする。

「とりあえず、降ろしてください。」

## その15（後書き）

妹登場です。レオナルドの態度が露骨に変わっている気がします。が、あんまり進展ありません。（たぶん。）次回更新辺りで解説するかも。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5513q/>

---

有給休暇

2011年8月6日14時58分発行